

結婚式の最中に義兄にどちゅ突き濃厚種付され、孕まされました。

「安定期に入ったら即ハメ解禁だ」と、新婚生活の裏で子宮を独占されています。

目次

プロローグ 義兄の指先が、私を壊した夜。

第一章 結婚式で、淫らにどちゅどちゅ責められる

エピローグ 永遠の縛り

プロローグ 義兄の指先が、私を壊した夜。

結婚式の前日。

鏡の中の私は、完璧に整えられた笑顔だった。唇の角度も、まつ毛の角度も。

けれどその笑顔の奥にある呼吸だけは、どうしても誤魔化せなかった。

「幸せそうに見えるよ」

ドレスの背を整えながら、義兄がそう言った。

彼は、母が再婚した相手の息子で血は繋がっていない。でも、家族という言葉が貼りついて
いる限り、私は彼をそういう目で見てはいけない。

だけど、あの日。わかっているのに、体が拒めなかった。

「……ありがとう」

言葉を返した瞬間、指先が背中を滑った。細いファスナーの金具が、蛇のように音を立てて上がっていく。

「明日、泣くなよ」

「泣かないわ」

息が詰まる。彼の顔が、すぐそこにある。結婚するのは、彼じゃない。

でも、この距離は壊れそうに近い。

ブライダルサロンでの最終の衣装合わせが終わり、家族で帰宅した。

式の準備も終わり、家の灯りがすべて消えた夜。二階の廊下に、義兄の足音がした。

「寝てるか？」

その声に、心臓が跳ねる。

「……まだ」

答えた瞬間、ドアがゆっくり開く。暗闇の中で、微かな光が彼の横顔を照らした。

乱れた前髪、喉仏、指先の形。ひとつひとつが、私の理性を剥がしていくようだった。

「指輪、もう見たか？」

「うん。きれいだった」

「そうか」

彼は少しだけ笑って、指を伸ばす。私の左手、婚約指輪を嵌める予定の指に彼の指が触れる。

「まだ、ここには何もないんだな」

「……っ」

そのまま、手のひらを包み込まれる。熱が、指の根元から心臓まで登ってくる。

「やめて……私は明日……」

そう言葉にしたはずなのに、声が震えていた。彼は答えないで、指先で私の薬指をなぞる。指輪より先に、その場所を私に覚えさせるかのように。

低い声が、暗闇に落ちた。

「おまえが誰かのものになるの、見たくなかったな」
「でも……」

ちゅっ
♡

彼の唇が、私の唇に触れる。触れた瞬間、世界の音がすべて遠のき、時間の感覚が消えた。

「ん……」

さわさわさわと、逆立つような耳鳴りのような音が、体の奥でうるさくなる。

「やっぱり、おまえはかわいいな」

彼の指先が頬をなぞり、髪を掬う。それだけで理性と欲望の境界が、熱で溶けていくのがわかる。

「……だめ、もう、こんなことは」

「だめって言いながら、抵抗しないんだな？」

囁きが、喉元に落ちる。彼が言う、どこまでが抵抗で、どこからが渴望なのか私にはもうわからない。

「なあ、俺のこと、ただの兄に思えるか？」

答えられない。

その沈黙がすべてだった。

ベッドの端に腰を下ろしたとき、花嫁という名の仮面が私からゆっくり剥がれていく。

「指輪を嵌める場所、わかってるだろ？」

彼の声が、耳元に触れた。

「俺の跡がある限り、誰のものにもならない」

その言葉が、呪いにも、赦しにも聞こえた。私は目を閉じる。彼の呼吸の音と、心臓の鼓動が重なる。幸福でも不幸でもない。ただ、この瞬間は紛れもなく、私の真実だった。

「誰のものにも……」

「そうだ」

指輪よりも先に、彼の指が私を選んだ夜。あの瞬間から、もう本当は誰の花嫁にもなれなくなったのだ。

婚約指輪よりも先に、彼の指が私の内側を探ったのだから。

そして、義兄が抱きしめて来る。

「……ダメよ、本当に……、明日結婚式なんだから」

震える声で訴える間もなく、ベッドに押し倒される。月明かりが薄く差し込み、彼の影が覆いかぶさった。

「まずは、他のところを確かめない」と

義兄の指が、スカートの裾を割って侵入してくる。ストッキング越しに太腿をなぞられる。

義理の兄、健太郎。

同じ屋根の下で暮らすうちに、こんな関係になってしまった。

ああ……。

父も母も一階で寝ている。私は、義兄とこうしてまた、体を重ねようとしていた。するりと指先が伸び、布の上から、おまんこをなぞる。

「濡れてるじゃないか」

「違っ……！」

否定するほど、指が執拗に這い上がる。

スッススッ。

割れ目の上を、何度も撫でられ、愛蜜が染みてくる。

「どんどん湿って来るぞ……嘘つきだな」

彼の吐息が、首筋を灼く。

はぁ……と、甘い声が漏れてしまい、羞恥で顔が火照った。

「明日には他人に抱かれる癖に……俺に、こんな簡単に許すのか？」

嫉妬混じりの囁きと共に、スカートが一気に捲し上げられる。レースのショーツに、染みが広がっていた。

「見ないで……っ！」

「しっ！ 親が起きて来るぞ」

唇で唇を塞がれ、頭上で両腕を縛るように掴まれる。

「全部見てやる」

義兄の指が、ショーツの脇にかかった。

「だ、ダメだつて健太郎……もうだめ」

「お前は拒めないよ」

「だめだつてば……」

粘着質な糸を引きながら、パンティの布が剥がされた瞬間、濃密な香りが立ち上った。

「凄い匂い……発情してるじゃないか」

「し、してない」

直接割れ目に触れた義兄の指が、掻き混ぜてくる。

ぐちゅっ♡じゅぷ♡
♡

「やっ……あん♡!」

思わず腰が浮くと、彼の膝が強引に股を開かせた。

「ほら……こうすればよく見える」

ぬ。ふ。っ　♡　く。ば。あ。　♡

人差し指と中指で秘裂を押し広げられ、空気に触れた膣口がひくひくと痙攣する。

「やだ……！　そこは、見ないでえ！　わたし結婚するのよ！」

涙声で懇願すればするほど、彼の瞳は獰猛さを増した。

「こんなに美味そうなピンク色で、誘ってるくせに？」

舌舐めずりをした義兄が、顔を寄せる。ちゅぽん！とクリトリスを吸われた刹那。

「あひい！♡♡」

柔らかな唇での、クリトリスへの刺激に、視界が真っ白に弾けた。

「もう、パンパンに勃ってるぞ。クリが」
「だめ」

くりゅ。くりゅっ。

「んっ♡ あっ……♡ ふぁ……っ！」

べろべろ♡ ちゅくちゅく♡

飴玉を転がすように、クリトリスを嬲られ続け、腰が勝手にガクガク跳ねる。

「だめえ♡ それ以上は……!!♡」

必死に脚を閉じようとするが、彼の肩に阻まれる。

ちゅぽお……♡ じゅるる♡

吸引されながら、皮の中へ舌が突き挿さってきた。

れれれれれれれ！ 舌の動きが突然早くなる。

「だめ！ ああ！ だめえ！」

「これから、親に聞こえるぞ」

「ううう」

れるれるれるる。

ダメだった……義兄は、私の好きな所を知り尽くしている。いきなり、絶頂が襲う。